

海賊レバッジ
るるぶる



[著者]



海冬レイジ

かのう・れいじ

機巧少女は傷つかない

ラジオ & ニコ生が面白すぎ！

ラジオは音泉さま & AnimateTV さま、

ニコ生は機巧少女チャンネルで配られます。

公式ページ [machine-doll.com] から

一発アクセスできるので、覗ては聞いてね！

札幌市在住。1月8日生まれ。A型。

マシンドール
機巧少女は傷つかない
Facing "Palace Laplace I"

海冬レイジ

MF文庫 J

[イラストレーター]

るろお



カバーアート るろお

Intermission I 断章ラプラスガイスト

1



「えつちな写真集を探す——んですか?」

見目麗しい黒髪の乙女型自動人形。夜々がきょとんとして言った。

雷真はげんなりして、

「その『えつちな』はどうから出てきた。欲しいのは昔の写真を集めたやつだよ」

「昔のえつちな写真集……。」

「その単語から離れる! 風景だ風景! ガイドブックとか、新聞記事とか!」

「夜々はたちまち頬を染め、目を潤ませた。両手の指を胸の前でからめ、

「嬉しいです……ついに二人は新婚旅行に——!」

「成層圏まで飛躍したな! 前提を全部すっ飛ばしたぞ! ——」

もちろん、結婚もしていなければ、旅行の予定もない。

こじは英國のリヴァプール、王立機巧学院の敷地内。庭園は荒れ果て、木立ちは枯れ、芝は焦土と化している。先日の戦闘の影響で、学内はひどく荒涼としていた。

二人は今、工学部の仮校舎の廊下を歩いている。プレハブで急造された仮校舎は隙間が

多く、貞冬の冷気が吹き込んでくる。

夜々は白い息を吐きながら、じてつと雷真の前に回り込んだ。

「雷真が写真に興味を持つてゐるなんて意外でした。お望みとあらば、夜々が極めて従順な

被写体になりますけど(?)」

「脱ぐなよ? ここは公共の場だからな?」

「わかつています。脱がない方が良くなりますよね?」

「おまえは何もわかつてない! つか、別に俺が撮りたいわけじゃなくて」

「撮られない……? はつ、まさか……ロキさんに!?」

「違う! もう何もかもが違う!」

「静かにしたまえ!」

「不意に、第三者の声が背後から刺さった。

「廊下で騒ぐな。仮にも校舎だぞ?」

振り向くと、廊下の奥から見知った顔が歩いてくるところだった。

燃えるような赤毛をアツツに留めた女教授。まだ三十代の若さだ。

「キンバリー先生! ちようどよかた。あんたを探してた」

「講義を受けにきた……はずがないな。夜会参加者は優雅なものだ」

今さらだが、夜会参加者は講義の出席を免除される。テストは免除されないが。
キンバリーは二人——とりわけ夜々に、注意深い眼差しを向けた。

「私を探していたと言つたな。用件は何だね?」

「ああ。実は今——」

「新婚旅行の計画を練つているんです(?)」

夜々が袖から口を挟む。雷真はスルーして、

「昔の写真とか、絵とか、あつたら見せて欲しかったんだ。先月図書館が燃えちまつたせいで、そういうの見られなくなっちゃ」

「風景写真かね? どここの観光地だ?」

「万摩のときの、水晶宮だ」

キンバリーは唇そぞろな顔をした。

「クリスタルレスなら、写真など探すまでもなく、移設したものがシドナムに現存して

いるぞ。当時のままというわけではないが」

「ああ、それが何だかボロくなつててさ」
先日、ロンドンでひと悶着あつたとき、雷真は偶然そこへ逃げ込んでいる。だが、管理

団体が破産したとかで、思い描いていたような美しさはなかつた。

「往時の姿——って言うのか? できれば色つきで、夜々に見せてやりたいんだ」

「雷真っ……夜々のために……!?」

きゅんつ、と夜々の胸が鳴る。雷真は照れくさくなつてそっぽを向いた。

今ばかりは、その通りだ。どうしても今、夜々に見せてやりたい。

「君が人形が氣違うなん、どういう風の吹き回し……なんて、訊くまでもないな」

ほんの一瞬、キンバリーはいたわるような目を向けた。すぐに普段の調子に戻り、「ならば、おあづらえ向きのものがある。大魔術師ラプラスの遺産だ」

「ラプラス……って誰だ? 有名人?」

「君は少し勉強したまよ。数学者としても天文学者としても名を馳せた人物だ。彼が晩年

に考案した魔術理論に『ラプラス変換』というのがある」

ややこしくなりそうだな……と思って、雷真は無意識に聞き流す態勢に入る。もちろん

キンバリーには簡単だったようで、苦笑されてしまった。

「至極簡単と言えば、『未来を予測する』ための魔術だよ。魔術師協会はもちろん、学院

も熱心にこれを研究した。——が、著しく信頼性に欠けていたため、頓挫した。最終的に、

未来予知の役には立たないと結論づけたな」

「未来の前提は現在であり過去——予知の精度を上げるために、前提となる〈現在〉の情報

を熱心に収集したんだ。ちょうど万博の頃、現地で集めた記録もある……はずだ。当時の

「へえ……それが水晶宮はどう関係なんだよ?」

水晶宮の姿も、そこに収蔵されているだろう

「……マジかよ。すげえな。研究のスケールがでかすぎて、想像つかねえ」

さすが、世界最高の魔術学院を稼務するだけのことはある。

キンバリーは自分の指輪を外し、雷真に差し出した。

「——これは?」

「私のIDが刻印されたリングだ。教授権限で入れる区画なら、マスターキーとして使え

る。勝手に保管所へ行って、探すとい」

「身分証明の指輪……か。その手の魔具は、あんまい印象がねえな……」

「私には次の説教がある。手伝つてやるわけにはいかない。——ああ、言つておくが、君

を信用して貸したんだ。おかしな真似はするなよ。」

「わかってる。ありがと!」

早速、夜々を連れて向かおうとする。その背中に、キンバリーが言った。

「ラプラス変換」の魔具は、重要機密保護施設にある。あれは史学部の管轄だから、地下

区画——DⅢ層のどこかだな。あの区画には『囚人を千年幽閉する檻』だとか、『迷宮を

み出す魔鏡』だとか、物騒なブツも多いので注意しろ

「おい! 酒落にならねえ」とサラッと言つたぞ!」

「問題の部屋には、一緒にマニアもあるはずだ。熟読してから起動しろ。くれぐれも、

壊すことのないよう」

しっかりと釘を刺される。雷真と夜々は低頭してキンバリーと別れ、工学部の仮校舎を後にした。その足で学部の中橋、重要機器保管施設へ向かう。

道行き、夜々は壁を輝かせて言った。

「すごいですね、昔の情報がたくさん入ってる道具なんて！」

「どんな見た目なんだろうな。百科事典……みたいな感じなのかね？」

「わくわくします！」

夜々が嬉しそうなので、雷真の足取りも軽くなる。

やがて、コンクリートで造られた、箱型の威容が見えてくる。その雰囲のよさな建造物

こそ、重要な機器保管施設だ。

警備員に事情を話し、キンバリーのリングを見せて、中に入れでもらう。

窓のない室内は鍼とオイルのにおいが充満していた。不親切な案内板を頼りに、昇降機で地下へ。電気

の照明をつけると、回廊状の通路に、無数の扉が浮かび上がった。

「ここがDⅢ層か。やたら部屋が多いな」

扉には部屋番号が振られている。だが、中に何があるのかは記されていない。

「どの扉だよ……？」

「ひとつずつ開けてみるしかないですね……」

夜々の言う通りだ。二人は手当たり次第に扉を開けた。キンバリーのリングでノブに触ると、それだけでロックが解除される仕組みだ。

各部屋は一〇メートル四方くらいの広さで、書庫や倉庫になつてある。倉庫には収納具が整頓して収められ、水晶玉やカード、魔石や指輪が目についた。

中身もすごいが、雷真は出入口の機巧装置に感心した。内部にいるあいだは鍵が閉まらないのに、部屋を出るとき自動でロックがかかる。上層フロア——学生の自動人形を預かる区画には、こんなセキュリティは存在しなかつた。

「いつも違う、そつちも違う」と言いながら、七つの部屋に入ったとき、

「あ、鍵です！」

夜々の声が弾む。その言葉通り、部屋の中央に大きな姿見の鏡が置かれていた。

床には巨大な魔力円が描かれ、壁には謎の紋式が刻まれている。鏡の手前には、譜面台

のよな書机があり、そこに分厚い本が置かれていた。

「マニアアルつて、これですかね？」

「らしいな。タイトルは『偉大なる大ラプラスに捧ぐ因果の解法』——

わけのわからない書名だが、はつきり『ラプラス』である。間違いない。

雷真は本を開いてみた。目を細くしたり、見開いたり、近付けたり遠ざけたり、老眼の

人みたいな動きをした後で、ぱんと相棒の胸に押しつける。

「……悪い、夜々。解説してくれ」

「任せてくれださい」

英語の読み書きが不自由な雷真に代わり、夜々が音読する。

やはり、この鏡こそが、目的の魔具たった。未来予知の機能は信頼性に欠けるが、集積した情報引き出すのは、簡単な魔術式で実行可能らしい。

「簡単な——つっても魔術式を書かされるんだろ？ 魔具じゃなくて自動人形にしてくれりや、御御は人形に丸投げできるんだけどな……」

「文法はここに載っていますよ。このくらいなら、夜々にもわかりそ�です」

「……いつでも思うけどよ、おまえってだいぶ頑いいな」

「そ、それほどでも……っ」

照れ照れ。夜々はマニュアルを片手に、上機嫌でスクリプトを書き上げた。

付属のチョークで魔法円に呪文を書き足す。早速、雷真が魔力を流してみた——

——が、何も起こらなかった。

「うんともすんとも言わねえぞ」

「構文は合ってると思います。一八五一年当時のロンドン、第一回万博……ひょっとして、

該当するデータが存在しないでしようか？ それとも、もう壊れて……？」

夜々がしょんぼりする。雷真は気の毒になつて、相棒の肩を叩いた。

「もう一度マニュアルを読んでみようぜ。こういうときは、えーと……『故障かなと思つたら』、叩いて直すその前に——胡散臭い見出しだな！」

だが、まさにその項に、答えが記されていた。

「魔力を流しても回路が起動しない——魔力は十分に足りていますか？ 本魔具は儀式魔術専用です」って、なるほど、そりゃそうだ！

雷真是地頭で足もとを見た。魔法陣を構築して行う大規模魔術だ、これは。

「ここ見てください。マニュアルによると、十人ぶんの魔力が必要——だそうです」

「大丈夫だ。この程度のこと、屁でもねえ」

「おまえのためならな——なんて言葉はさすがに言えない。だが、夜々には伝わっている

ようで、黒い瞳を温らせ——こくりとうなずいた。

「任せろ。俺が十人力つてところを見せてやる」

「だ、大丈夫ですか？ 雷真、まだ体力が戻っていないんじや……？」

「十人？ 何だ、そんなもんか」

雷真はぱつとして制服の袖をまくった。まだ包帯の残る腕を叩き、

「任せろ。俺が十人力つてところを見せてやる」

「だ、大丈夫ですか？ 雷真、まだ体力が戻っていないんじや……？」

「大丈夫だ。この程度のこと、屁でもねえ」

おまえのためならな——なんて言葉はさすがに言えない。だが、夜々には伝わっている

よし、やるぞ」

雷真是印を結び、息を整え、丹田に魔力を集中した。

両手を聞いて突き出す。生き血が魔力が変換され、大出力となる。膨張した魔力は体内

で収束し、細い糸となつて、雷真の指先から放出された。

十本の傀儡糸が魔法円に流れ込む。魔術式が輝き、二人の姿を青白く染め上げた。

「おお……何か……視えてきたぞ！」

鏡が水面のように揺らめき、おぼろげに像を結び始める。

「おお……何が……視えてきたぞ！」

手をつかんだが、勢いは止まらず、自身も鏡面に飛び込み破目になつた。

書机が倒れ、ぱさり、とマニユアルが床に落ちる。

静寂が室内に満ち——それつきり、部屋には誰もいなくなつた。

2

「いろいろ姉さま、落ち着いて——姉さまがあわてても仕方ないよ！」

「あ、あわててなどおらぬ。そもそも、おお落ち着いてなどいられぬ！」

「どつち!? わかってるけど!」

「夜々一つ！ 夜々一！ 一二三！」

悲痛な声がこだまする。何事かと振り返る学生たち——その視線の先に、一人の乙女の姿があった。どちらも和装の日本製自動人形で、青みがかった銀髪のいろいろと、紅葉色の髪の小紫。二人は夜々の姉妹であり、雪月花の〈雪〉と〈花〉だ。

一人が近付いてくるのを、キンバリーは頭痛をこらえながら眺めていた。

「そんなに叫ぶな。学生たちが何事かと思うだろう」
まして、大きな戦いの後だ。学内はピリピリしている。

小紫が気付き、ばつの悪そうな顔をした。

「ごめんなさい先生。いろいろ姉さま、ちょっと錯乱してて……」

「お助けくださいキンバリー殿！ 後生です！」

いろいろがすがりついてくる。とつくに半べそをかけていた。

「夜々が朝から見当たらず……もしものことがあつたら、私は……私は……この機巧都市を永久凍土に沈めてしまします……」

「……相変わらずだな。いや、重症化しているのか。花柳斎殿は——査問中か」

保護者不在、つまりは暴走し放題。

放置するわけにもいかず、キンバリーは答えを教えてやつた。

「夜々とライシンならば、重要機巧保管施設にいる」

ぱつといろりの顔が明るくなつた。

「それはよきことを聞きました。恩に着ます。では、私はこれで——
「待て待て。あそこは仮にも學院の中枢 許可なく入ることはできません」
「心配なく。このいろり、そこらの警備員などは後れはとりません」

「頭の中が心配だぞ。何をやらかすつもりだね」

「息が止むせび泣く。その背中を、小紫が押していく。」

「花の乙女、おまえが面倒を見る。警備には私から連絡をつけておく。二人がいるのはD

三層のどこか——鍵のあいてる部屋にいるだろう」

「はーい！ だって、姉さま、よかつたね！」

「あ、ありがとうございます……キンバリー殿……！」

「感涙にむせび泣く。その背中を、小紫が押していく。」

「夜々のやつめ、心配をかけおつて……見つけたらきつくお灸を振えねばつ」

「いろりは娘しそうに言つて、妹に支えられ、重要機巧保管施設へ向かつた。

——のだが。

わずか一〇分後、戻つてきたいろりは、またしても涙目だった。

「キンバリー殿、あいてる部屋に夜々がおりません！ 雷真殿も……！」

キンバリーは次の講義に備え、プリントを刷つているところだった。いざかが容易する

一方、きな臭いにおいも嗅ぎ取つている。

〔今、彼らは、軽い封印くらい難なく破つてしまふからな……〕

〔今は、マスターキーを借り受け、D三層へと降りた。〕

〔同じような罪の前をいくつも通り過ぎ、目的の場所を目指す。〕

〔確か——ここだと思ったが〕

ひとまず、目についたノブをひねる。がちり、と硬い手こしたえが返ってきた。

まさか、トラブル——？

危険度の高い魔具は、もとより厳重に封印されている。だが、安全とされていても、扱い方を間違えば、危険な現象に見舞われる。魔具とはそういうシロモノだ。まして、本当に危険なツツに手を出した可能性もある。

〔今は、彼らは、軽い封印くらい難なく破つてしまふからな……〕

〔今は、マスターキーを借り受け、D三層へと降りた。〕

〔同じような罪の前をいくつも通り過ぎ、目的の場所を目指す。〕

〔確か——ここだと思ったが〕

〔ひとまず、目についたノブをひねる。がちり、と硬い手こしたえが返ってきた。〕

〔今は、彼らは、軽い封印くらい難なく破つてしまふからな……〕

〔今は、マスターキーを借り受け、D三層へと降りた。〕

〔同じような罪の前をいくつも通り過ぎ、目的の場所を目指す。〕

〔確か——ここだと思ったが〕

〔ひとまず、目についたノブをひねる。がちり、と硬い手こしたえが返ってきた。〕

〔今は、彼らは、軽い封印くらい難なく破つてしまふからな……〕

〔今は、マスターキーを借り受け、D三層へと降りた。〕

〔同じような罪の前をいくつも通り過ぎ、目的の場所を目指す。〕

〔確か——ここだと思ったが〕

〔ひとまず、目についたノブをひねる。がちり、と硬い手こしたえが返ってきた。〕

「これは施錠されているな。中から手動でロツクもできるが……」

「先生……、あいてるのははつちだよ……」

「先生の、ひつ後ろの扉を開けている。通り過ぎていたようだ。

小紫がひつ後ろの扉を開けている。大きな鏡が目に飛び込んできた。

「ああ……確かにこれが『予見の鏡』オラクリオンだ」

もつとも、「予見」と呼べるほどの未来予知はできず、近頃は単なる大容量の情報記録

媒体として認識されている。

キンバリーは注意深く床を観察した。

「積もったばかりに足跡が残っている。一人がここを訪れたのは間違いない……が、肝心の本人たちがいないな」

部屋には鏡と書机があるだけで、人間が隠れられるようなスペースはない。

もし雷真がこの部屋を後にしたのなら、自動で施錠されたはず。

（何者かに転移され去られた……）だが、この建物は魔術的に施錠されている。結界

を貫通して転移できたな。それはよほどの実力者だ

キンバリーの脳裏に警報が鳴り響いた。

そんな芸当ができるのは、魔術結社《薔薇の師団》の者が、狂王エドマンドの手の者か、

それとも、その二つに該当しない——新たな敵か。

そのとき、雪月花のセンサーと、キンバリーの第六感が、同時に気配を察知した。

「誰かが廊下にいる。息を潜め、こちらをうかがっている！」

「夜々か!?」

いろいろが部屋から飛び出す。小紫とキンバリーも、急いでその後を追った。

長い廊に、乙女がひつそりと立っていた。

逃げるか、となるが、躊躇したように見える。だが、結局は逃げず、薄紺の面覆い

越しにこちらを見ていた。

黒いドレスを身にまとい、髪は薄桃色。存在自体が萎みを放つ、精緻な自動人形。それ

は雷真の宿敵マグナスが操る《戦隊》の一體で——

「火垂！」

3

「姉さまっ、ダメー！」

と小紫は叫んだのだが、いろいろはもう己の魔術回路を起動していた。

一帯の空気がキラキラと輝く——空気中の水分が凍っている！

「馬鹿者が……！」

「小紫」の背後でキンバリーがぼやき、とつさに魔力を高める。いろいろが放った冷気は、氷の槍となつて火垂へ飛び、床一面にびっしりと霜が降りた。

火垂は左手を突き出しただけで、氷槍を受け止めた。槍はてのひらにぶつかると、その直前で蒸発してしまった。

立ちこめる水蒸氣を吹き飛ばし、火垂が高速で突っ込んでくる。いろいろは冷氣で迎撃しようとした——が、その両者のあいだに、キンバリーが割って入った。

いつの間に抜いたのか、ダガーと拳銃を抜いている。切っ先をいろいろに、銃口を火垂に突きつけ、キンバリーは冷やかに言った。

「私はバカが嫌いだ。重要機巧の保管所だぞ、ここは」

よくよく見れば、キンバリーの魔力が廊下全体を覆い、壁や床を保護していた。いろいろの冷気は建物を傷つけることなく、そのまま直前で防がれている。

恐るべき魔術防護。そのふん波旁はさけられず、さすがのキンバリーにも汗の玉が浮いていた。いろいろは我に返り、たちまち恋嬌した。

「もつ、申し訳ありません……。しかし、ひょっとしたら、火垂が夜々を……。」

「口答えるな！ 防衛装置が作動すれば、ただちに警備に拘束される。魔術喰い騒動のとき、夜々がここでどんな目に遭つたか知らないのか？」

「……面目し難いもありません」

いろいろが畏まる。小紫はちょっと可笑しくなつた。普段は落ち着いていて、夜々を叱る個のいろいろが、こんなにも取り乱し、叱られる側に回つていて。

それだけ夜々が心配なのだ。それほどでも温かくて——とても切ない。

鼻の奥がつんとして、泣きそうになる。そうしているうちに、キンバリーが火垂を問い詰めていた。

「おまえもだ。反撃しようとしておいて、正当防衛などとは言うなよ？」

「……お言葉ですが教授、先制攻撃をしかけてきたのはそちらです」

「おまえは傷ひとつ負わなかつただろ。雪の乙女も手加減したんだ。——おまえは一人できたのかね？」マグナスはどうした？」

火垂は答えなかつた。

「…………」「（番目）の行方を知っているのか？」

「だんまりか。別にそれでもかまわんが——登録人形が不法侵入した以上、私がその気に

なれば、マグナスに处分を加えることができる」

まさに、殺し文句。火垂は渋々といったふうに、重い口を開いた。

「……（下から二番目）の行方は知りません」

「ほう。ここで何をしていた？」

「私は……マスターの命で、〈下から二番目〉を監視していました」

嘘とも思えない。戦隊は常に雷真の動きをマークしているのだ。

それはキンバリーも知っていたようだ。あきれ顔でため息をついた。

「天才くんは相変わらずあいつにこ執念というわけか……では、〈下から二番目〉たち

をおまえも見失ったといふことだな？」

「…………ここに入るところでは、確認しました」

火垂はずっと建物の入り口を見張っていたそうだ。雷真が出てこないまま、いろいろが出

入りし、キンバリーまでやってきたので、中に様子を見にきたらしい。

「つまり、雷真も人々も――」

「まだこの中にいる、ということか……」

キンバリーが部屋を振り向く。室内はやはり無人で、鏡が置かれているだけだ。

「手がかりを探す。君ならは廊下にいたまえ」

「…………解せんな。転移を可能とするような、高レベルの魔具はない。魔術式が途中で転移

術式に誤認されている様子もない。シングルスエラーも……ない」

独り言を言いながら、調査を続けるキンバリー。その後ろで、いろいろがもじもじと、恥

ずかしそうに口を開いた。

「ほ、火垂……」

機械的な声が返ってくる。ヴェールの下には冷たい双眸があつた。

「そ、その……先ほどは、疑つて……すまなかつたな」

謝る。火垂は面食らったような顔をした。

いろりはふわっと目をなごませ、微笑んだ。

「元気うでよかった。体はもう、いいのか？」

「…………ええ」

「そうか。そ、それだけだ」

「あ……」

きびすを返し、離れていくいろり。伸ばしかけた火垂の手が泳ぐ——自分でも滑稽だと

思ったようで、火垂はあわててその手をつかみ、引き戻した。

その一部始終を、小糸がはつちり目撃していた。

火垂と目が合う。小糸はぎくりとして、とりあえず、

「えへっ♡」

笑つてこまかした。怒るかな、と思つたが、火垂は何も言わず、顔を背けた。

ヴェールのせいで、表情がよく見えないけれど――

薄桃色の髪にまぎれて、耳が赤くなっている。小紫は意外の念に打たれた。

「武陵さんって、機械みたいで、ちょっと怖い感じだったけど……」

「ほっとしたら、わかり合えるのではないか？」

外見にコンセプトも同様に花と似ているのではないか？

「だが、たとえ戦隊と雪月花が似てゐるのだとしても、わかり合える存在だとしても、主な」

「私たちが敵同士だ。雷具とマグナスは血で血を洗う殺し合いをするだろう。その日は近い。わずか七日のち、決戦のときはくる。」

実戦になれば、綺麗事は言つていられない。やらなければ、やられる。

小紫は自分の腰の後ろ、銀剣を意識した。

今は亡き友の形見——この剣で、小紫が火垂を斬ることも、あるかもしれない。

暗澹たる気分になる。待ち受ける過酷な未来に、小さな胸を痛めていると、

「手がかりがないな。お手上げだ！」

肩をすくめながら、キンバリーが廊下に戻ってきた。

「上に報告した方がいい。これはもう失踪事件だ！」

「ふつふつふ……どうやら私たちの出番のようね！」

と、朗々たる声が廊下に響き渡った。

なめらかな金髪を燃然と輝かせ、女子学生が歩いてくる。彼女が現れただけで、周囲が

明るくなったような気がした。

輝くくなつたような気がした。ただし、胸は控えめだ。そして、それすら偽物だ。

普段の青い帽子ではなく、鹿撃ち帽をかぶつている。帽子の上には鋼色の仔竜——自動人形シグメントが乗つっていた。

「事件と聞いては黙つてられないわ。そうでしょう、ワトソンくん！」

キンバリーは目をすがめ、とがめるように言った。

「なぜここにいる、シャルロット！」

「キンバリー先生 話はすべて聞かせてもらいました」

「盗み聞きで、かね？」

「ち、違います！　たまたまっ」

「こんな場所にたまたま現れるはずがないだろう。気配を隠して、つけていたのか。腕を

上げたのは認めるが……便利な力は人を堕落させるな」

守護精靈を得たシャルは、先祖譲りの才能を開花させ、めきめき力をつけていた。遠方

の音風の精霊に集めさせると、すぐさま勢いを取り戻し、

「ともかく、失踪事件は私が解決に導くわ！　このシャーロット・ホームズがね！」

鹿撃ち帽の上で、仔竜の姿のシグメントが頭を下げた。

「すまない。染まりやすい性格なのだ。アンリの看病がてら、読書熱が再燃して——」「黙りなさいシグメント、余計なことは言わなくていいの。そんなことより事件よ、事件。これって死体とか出できちゃバターンかしら?」

「実際に死体を見たら引っこり返りそうなものだが、シャルは姫々として言つた。

「そ、その死体は見えた? 雷真殿ですか? ……シャルロット殿……?」

早くも泣きべそをかきながら、いろいろが控えめにツッコミを入れた。

4

シャルは虫眼鏡を取り出し、早速、事件現場の観察を始めた。

「…………いぶん現場を荒らしてくれたわね。足跡が多すぎよ!」

同じようなサイズの足跡が重なつて、どれが誰のものだか、わかりにくい。だが、小紫といふ名前は、足跡だけ、少々は部屋に入つてないので、かろうじて判別できる。

キンバリーは苦笑しながら、

「どうだね、ホーミズくん? 手がかりは見つかったかな?」

「…………気になります」

ビンを見つめたのか、探偵小説を読み耽った後だけに、頭は冴えているようだ。

「この一番大きな足跡、部屋の外に出でないわ。夜々…………らしきアーツの跡も」

「つまり、雷真と夜々はまだ部屋の外に出でていない?」

シャルは煙しそうに身震いした。

「…………これって『密室』の変形よね。普通に考えれば、あいつらはまだこの部屋の中にいる——だけど、『明白な事実ほど錯誤を招きやすいものはない』わ」

いかにも引用めいたことを言って、シャルは部屋の中央、鏡に近付いた。

「何と言つても、この鏡が怪しいわね。これに何か、錯誤が潜んでいるはず……」

「なぜ、そう思う?」

「魔術師の直感です!」

堂々たる宣言を聞いて、シグメントがあきれた様子でつぶやいた。

「シャルよ。当てづっぽうは確か、ホーミズのもつとも嫌うところでは——」

「鏡を使ったトリックなんて基本だわ。絶対何か仕掛けてるわよ!」

「ホーミズは確かに、先入観を持って事に当たるのはよくない、とも——」

シグメントの指摘を無視して、シャルは鏡をのぞき込む。

「魔力の殘滓が漂ってるから、起動したのは間違いないわ……先生、この魔具は?」

キンバリーはマニユアルを拾い上げ、雷真にしたのと同じ説明をしてやつた。

集積した情報をアセス、記録された映像を映し出すものだと。

「それは……本当ですか？」

「なぜ、疑う？」

「たとえば、もしこれが転移の魔術——別の場所に続く（開）のようなものなら、あいつらがここから消えた理由は簡単に説明できます」「この部屋の鍵は、自動でかかるとおっしゃいました」

「合理的だな。だが、魔術回路の専門家たる私が、こうして靈視して見ても——転移魔術

の魔術式は見当たらない。この回路はやはり、オラクリオンだ」

「あの……」

黙つて、黙つて行きを見守つていたりが、逸處が手に手をあげた。

「夜と雷電殿は、本当に部屋の外に出ていないのでしょうか？ キンバリー殿は先ほど、

この部屋の鍵は、自動でかかるとおっしゃいました」

「言つたな。マスター！ 」が入り口を通過すると、鍵がかかる仕組みだ

「では、あの指輪をこの部屋のどこかに隠しておけば……？」

指輪を置いて、本人だけが外に出る。それならば、部屋は施錠されないまま、どこへでも行けるというわけだ。

いろいろのとなりで、小紫が首をひねった。

「だけど、足跡を残さず外に出る方法って、ある？」

「あるわよ。会動で浮いて行けばいいじゃない？ くつ、何でつまらない結論……！」

「だけど、足跡を残さず外に出る方法って、ある？」

「あるわよ。会動で浮いて行けばいいじゃない？ くつ、何でつまらない結論……！」

シャルが海がる。《雪密室》とやらは、魔術師には無効だ。

「だけど、部屋を出たって意味ないわよ。だって——」

廊下の火垂に視線をやる。視線に気付き、火垂が「何か？」という顔をした。

「仮に部屋を出たのだとしても、この重要機巧保管施設の外には出でていない……。それは

あの戦隊が証言していることよ。そもそも、イロリの言う通りなら、この部屋のどこかに教授の指輪があるはず」

「廊下に部屋を出たのだとしても、この重要機巧保管施設の外には出でていない……。それはあの戦隊が証言していることよ。そもそも、イロリの言う通りなら、この部屋のどこかに教授の指輪があるはず」

シャルが部屋を見回す。ひとまず、目につくところには存在しないし、キンバリーにも見つけられないと、小さなものなので、隠す手段はありそうだ。

「いろりもそう思つたようだ。さらに入り口に言った。

「……魔術で隠しているのでは？ 小紫の『八重櫻』を用いれば、簡単です」

「コムラサキはそこにいるじゃないの」

「類似の魔術があるでしょ。この建物のどこかで見つけたのかも……」

「それこそ、あり得ないわね」

シャルは自信たっぷりに言い切った。キンバリーは意外に思つて、

「なぜ断言できる？」

「なぜなら——そんなご都合主義的なアイテムが！ ノーヒントでいきなり飛び出すなんて、探偵小説的にフェアじゃないからよ！」

「……極めて正しい珍説だ」「同じ理由で『誰にも気付かれない抜け穴がありました』なんてのもダメ！」

「シャルよ、これは探偵小説ではない」
「シゲムントの冷静なツッコミを聞き流し、シャルはびしつと廊下を示した。

「だから、手がかりはこの部屋の外にあるわ！」

「えつと驚く一同の前を素通りし、シャルは悠々と回廊に出た。となりの部屋——先ほど

キンバリーが入ろうとした部屋に行き、ぱんっと扉を叩く。

「さあ先生、この扉を開けて！ 私の推理が正しければ、あいつらはこの部屋でいかがわ

しい行為に耽っているはず……！」

「……飛躍しすぎたな。なぜ、そこんだね？」

「これ見よがしに同じ形の小部屋が並んでいるのに、部屋の取り違えが起こらないなんて

物足りないわ。このプロットは生かされるべきよ！」

「そんなわけはないだろう。と思いながら、キンバリーはマスターキーで開錠する。

がらんとした部屋の中央に、大きな姿見の鏡が鎮座していた。

床には複雑な魔術式が描かれ、鏡の前には諸面台のような書机。そこから落ちたと思われるマニュアルが一冊、床に放置されている。

先ほどまでいた部屋と、まったく同じだ。鏡の位置や壁の汚れ、誰かが書き足した魔術式——拳げ匂、皆がつけた足跡まで——

「ぴょこんと小紫が飛び跳ね、驚きをあらわにした。

「シャルロットさん、すうごーい！」

「え？ そ、そ、そうね！ まあね！」

明らかにシャル自身も驚いている。——推理とやらはどうした。

「だけど……あいつら、いないわね……？」

シャルはあごに手を当て、考え込んだ。

「取り違えのトリックだとすると……この部屋を特徴づけるのは鏡だから……犯人は鏡を

一枚用意して、私たちを騙した……？」

思考を整理している。その横で、キンバリーも頭をフル回転させていた。

この部屋は本当に、「何から何まで」となりと同じだ。雷真と夜々の足跡はともかく、

キンバリーたちの足跡まで、そつくり同じ——入ってすらいないのに、だ。こんなことは、

普通は起こらない。記憶を引つくり返し、部屋の由来を思い出す。

この部屋に保管されているのは、何の魔具だ？

(そうか……そういうことか……)

「謎は解けたわ！」

キンバリーが結論に達すると同時に、シャルが叫んだ。

「つまり、これは初めから計画的犯行だったのよ！」

「いろいろと小柴が息をのむ。シャルは名探偵よろしく、もつといぶつて語り出した。

「学院が荒れ果てて、寮も仮住まい、なかなか二人つきになれなかつたからで、ここで

イヤコラされた魂胆だったのね……許せない！」

「いきなり雲行きが怪しくなる。一同は半信半疑——二信八疑くらい——だったが、一応

はさえぎらずに続きを聞いた。

「あの一人の小賢しいところは、最初から鍵の開いていた方——ダミーの部屋を用意して、いざってときの時間稼ぎに充てたところね。私たちがとなりでわしきや言つてゐるとき、この部屋にいて——逃げ出した。こっちの部屋が施錠されていたのは、中から手動で鍵をかけただけ。本当は、ここですといかがわしいことを——」

「あの……ですが、ここにいたはずの雷真殿は……どちらに？」

「えつ？ もうひとつ、それは……」

シャルの眼が泳ぐ。ややあって、びんと指を立てた。

「そう！ 両方とも時間が稼ぎ！ わざわざ説を用意して、自分たちは最初からどこかで

いかがわしいことを！」

「……どこか、とはどこですか？ 建物の出入口は火垂が見張つていましたが」

「ええつと、ううんと——あ、もうひとつ出口があるじゃないの。地下に」

「ええつ？ さつき、抜け穴はダメだと……」

「と、とんでもなく盲点な場所ならないのよ。それに、ここが地下空洞につながつてゐるのは既出情報でしょ？」

「それはこたびの騒動とは無関係の情報です。アンフェアです」

「うるさいわね！ これは探偵小説じゃないわよ！ 事実は小説より奇なりよ！」

生温かい視線がシャルを包む。シャルはついにカブト——鹿撃ち帽を脱いだ。

「た、探偵は廃業するわよ。それで文句ないでしょ！」

言い終わると同時に、寝まいの閃光が廊下に走った。

光芒とともに魔力の波が伝わってくる。魔力の発生源は隣室だ。

キンバリーはふところのダガーに手をやり、となりの部屋に飛び込んだ。

鏡の魔具の前で、尻餅をついている者がいる。その胸の中には彼の相棒の乙女がいて、

いわゆる（お姫さま抱っこ）の体勢だった。

「ててて……先生？ 血相變えて、どうしたんだ？」

こちらに気付いて、怪訝そうな顔をする。それはまぎれもなく——雷真だった。

わけがわからず、雷真は相棒と顔を見合せた。
ちよつとした冒険、無事にもの世間で見つけてみると、大勢の顔見知りに囲まれて
いる。驚いた様子のキンバリー、派ぐむいろり、ほつと安堵の息をつく小柴——廊下には
火垂の姿がある。シグメントを連れたシャールは、なぜか顔面蒼白だ。

「ど、どうやら……現場を押さえてしまったようね……」

「あ？ 何の現場だよ？」

「探偵が駆けつけたときには、犯行は既に【なされた後】……探偵は常に敗北を強いられ
る——そのテーゼを破つて、現場を押さえてしまうなんて！」

「おい！ 犯行って何だ！」

「しらばっくれないで！ 周到に私たちを欺いて……私たちの気配を感じながら、隠れて
するのが興奮するのね！ 信じられない（不潔）！」

「何が？ 何をするんだ!?」

戸惑う雷真の腕の中で、夜々は恥じらいの表情を見せ、雷真的胸を突ついた。

「もー、シャルロットさんたら、ヤ・キ・モ・チ▽」

「この夜々、事態をややこしくするな」

「ややこしい——夜々だけに？」

「……わざわざ日本語でつまんない洒落を言うな」

「やや子をつくつていきました！」

「洒落にならない洒落を言うな！」

意味がわからず、きょとんとするシャルとキンバリー。ほかの者には日本語がわかつて
しまうので、夜々の危険な発言は乙女型自動人形たちに共有されてしまった。

「……なるほど、よくわかりました」

抑揚とともに温度まで消えた声で、いろいろが言う。ただならぬ気配に、雷真ばかりか、
シャルまでたじろいだ。

「ちょ……イロリ？ 何かちょっと……急に寒くなつたんだけど」

「シャルロット殿のご慧眼には感服いたします。どうやら貴女の推理通り、二人はいかが
わしいことをしていただようですか……ふふふ」

「わ、わかればいいのよ。だけど、何か……怒つてない？」

「おお怒つてなどおりません。ここにいるり、妹の幸福を喜べないほど、一見の狭い
女では決してなくつ」

「姉さまは！」、すねてるだけだよね？ 自分が敷帳の外に置かれちゃつて▽」

小柴が茶化す。國星を指されたのか、色白のいろりが真っ赤になつた。あうあうと何か

を言おうとしたが、上手い逃がれが思いつかない。周囲の視線——特に火垂の目に耐えかねた様子で、いろいろは完全に自分が見失った。

「わたくし、私はただ……う……わう……わにゃあー！」

人格崩壊。いろいろは謹慎の奇声を発し、猛烈な冷気をまき散らした。

破滅的な予感が空間を支配する。氷面鏡が全開の力を出せば、こんな小さな部屋、

マイナス二百度にも達するだろ。

「やめろ！ 俺はもう魔力がカラ——そ、うだ火垂、おまえの魔術で抑え込んでくれ！」

火垂に助けを求めるが、火垂は冷め切った、虫ケラを見るような目をした。

「今回のこと、マスターにはそのように報告します」

「えつ、何が！」火垂待て！ 見捨てるな！」

それきり雷真を一顧だにせず、火垂は素早く離脱した。

わけがわからないまま、雷真は冷気の満にのみ込まれる。とんだ災難だと思いながら、この滅茶苦茶な展開に、懐かしい日常を感じたのもまた、事実だった。

「どうやら不思議の片方は、こいつで説明がつきそうだ」

「迷宮を作り出す魔術とはつまり、このことだったようだ。私も実物を見るのは初めて

小さな手鏡を手に、キンバリーが言う。

「雷真は冷気の満にのみ込まれる。とんだ災難だと思いながら、

この滅茶苦茶な展開に、懐かしい日常を感じたのもまた、事実だった。

だが、資料は閲覧したことがある

手鏡をこちらに向ける。鏡に映った雷真は、ふてくされた顔をしていた。しもやけで頬

が赤くなり、まつ毛にはまだ氷の粒が張り付いている。

「これは『ラビュリントスの鏡』——《空間擬態》の魔具で、指定した場所とそつくり

同じ空間を作り出す。幻視の一種だが、触覚をも欺瞞する高等な魔術だ」

シャベルは魔撃ち相手のようにしてしまながら、悔しそうに言った。

「そんな魔術への意味があるって言うのよ……」

「いくらでもあるだろう。侵入者を撃退する本来の使い道はもちろん、特定エリアの監視

や、特殊部隊の突入前演習にも使える。のみならず、はるか彼方をコピー対象に設定した

場合、情報伝達速度が光速を超えるのではないかという、壮大な科学実験が——

誰もついてきていないのを知り、キンバリーは嘆息した。

「まあ、その話はいい。要是その魔術の誤作動——（下から二番目）が大魔力を放出した

せいが、最後に使った教授が悪戯心を出したのか——ともかく、となりの部屋をまるまる

コピーしていたというわけだ。探偵小説のプロットで言えば、ただ混乱を引き起すだけ

のファクターダナ」

雷真と夜々は、最初から最後まで、初めの部屋にいた。隣室の魔具が誤作動したせいで、混乱を招く事態になつた……というだけだ。

キンバリーの理路整然たる説明を聞いて、一同に納得感が広がる。ただし、自称名探偵だけが不満げで、地団駄踏んで悔しがっていた。

「後出し設定なんて早つけよ。そんな結果、探偵小説の読者は納得しないわ……」

「上手く脚色したまえ。それより（下から）『番目』、今の話だが」

キンバリーは異空間で夜々と見て、力を押すように訊いた。

「本当に、異空間に引きずりこまれた――と言うのか？」

雷真は部屋の中央、魔具の鏡を見やつて、

「ああ、ひどい目に遭ったぜ。まあ、見たいものは見れたからよしとするけどさ」

「ありし日の水晶宮――いい思い出になりました（△）」

夜々がにっこり笑う。雷真は無意識に口を細めた。

「本当に、異空間で夜々と夜々と見て、力を押すように訊いた」

「本当にもこう言つてるし。それ自体は問題ないんだ。問題は……」

「雷真になつた類をさすりつゝ、横目でいろいろにらむ。

いろいろはびくっと伸び上がり、ひれ伏した。

「も……申し訳ありません雷真殿……とんだ早とちりを……！」

「早とちりで怪我させるのはやめる。先生が守ってくれなきや、死んでたぞ」

「そうです。姉さまったら、思慮が足りません」

「おまえが言うなよ夜々！ 鏡見る鏡を！」

「どうかお赦しください……このいおり、何でもいたしますから……！」

その言葉に、夜々が過剰に反応した。わなわなと震えながら、

「何でもするつて……それは美質誘い受け……!?」

「ちちち違う夜々。なな何を馬鹿なつ、そそ、そのようなんふだらなこと！」

「噛み喰みです姉さま！」あからさまに期待してます！」

姉たちのやり取りを見て、小紫が小悪魔っぽく笑つた。

「（いや）、姉妹平等に可愛がつてもらつちゃう？ まずは何？ お風呂？」

「な、ならぬ小紫！ 何と破廉恥な……一度に三人など、ふしだらな！」

「姉さま~~~~~それは、人づつならOKつていう意味~~~~~!?」

姉妹たちが騒ぎ出す。雷真はどうつづりを恐れ、シャルの陰に隠れた。

「なつ、何よ！ 何接近してるのは愛恋！」

「ずいぶんだな。悪いがシャル、俺は先に戻るから、あいつらの注意を惹いててくれ」

耳元でささやくと、シャルはびくと体を震わせた。

なげだか赤くなり、「…………うん」と小声でうなづく。素直すぎて不気味だが、もちろん

口には出さず、雷真はそよぐと部屋を出た。

出がけ、キンバリーの不審そうな声が耳に入った。

「……やはり、おかしな話だ。この魔具には秘された効果があるのか――この件は、学院

長に報告した方がよさそうだな。……あるいは、協会の方にも」

探偵こつこの反省会をしたいから——なんていふ無理のある理由に、キンバリーは文句を言わず、すんなりマスター・キーを渡してくれた。

「勝手に魔具を使うなよ。すぐにバレるぞ」

とだけ言い残し、足早に地上へ戻つて行く。

雪月花の姉妹も雷真を追い、とっくに部屋を出て行った。シャルははやる気持ちを抑え、魔鏡《オラクリオン》の前に立つ。

ぱさぱさとシグムントが飛んできて、鏡の上に降り立つた。

「何をするつもりだ?」

「きやん! うううるさいわねっ、驚かさないでよ!」

「君も過去の情報が扱たいたいのか?」

「え、過去? ああ……えうね、おばあさまの資料とか、残つてゐるかも」

「違うのか。では、ひょっとして——〈未来〉が観たいのか?」

シャルは明らかに運動不審になつた。落ち着きを失くし、目をそらす。

「そ……んなわけないでしょ。大体、未来の何を見ようつて云うのよ」

「つまり、未来の配偶者を」

「何でわかるのよー?」

声が裏返る。シグムントは見透かすような眼をして、じつとシャルを見た。

「なるほど、結婚相手が雷真かどうか、確かめずにいられないのだな」

「いやっ、やめて! 私の心を見透かさないで!」

シャルは勇を抱えて逃げ惑い、畏怖の目でシグムントを見た。

「シグムント! 貴方まさか、名探偵……!」

「……ワトソンの目にも明らかだと思うか。アソリのところへ戻らなくていいのか?」

「もちろん戻るわよ。いつ目が醒めるかわからぬもの。だけど……ほら、ね? こんな

チャンスは滅多にないでいいか……ね?」

「……よほど気になるのだな。まあ君くらいの歳の少女には、ごく自然なことだ

「べ、別に結婚なんかどうでもいいの。ほら——そう、夜会がどうなるのか! あの馬鹿

が無事!」

「いずれにせよ、雷真のことだな

「ぐぐぐ……そうよ! 悪い?」

シャルは開き直り、書机からマニュアルを取り上げて、バラバラと目を通した。

「どうやら、十人がかりで儀式をする——らしいわ」

「残念だったな。ここにいるのは君一人だ」「大丈夫、私って友達がたくさんいるのよ、ヒノワ、フレイ、アリス、あの双子——この手の話ならウエストン先生やエリーアーテ先生も食いつきそうだし。そもそも、私とロツテだけでもいけるかもしれないわ。あのバカは一人でやったんだし、何と言つても、ロツテは〈鏡の精〉なんだもの。試しにやってみましょ」

己の守護精靈に呼びかけ自身に眠る精神能力を引き出す。

金髪に青白い魔力の光が宿り、ふわりと勝手に浮き上がった。

高めに高めた魔力を、叩きつけるように鏡に流す。利那、鏡の奥で光が散った。

「反応あり! やつたわ——つて、ええっ!?」

女の細腕のようなものが飛び出して、シャルの頭を抱え込む。

シグメントがシャルの髪に噛みついたが、もちろんそれで引き止められるはずもなく、

一人はたちまち鏡の中に引き込まれてしまった。

光の乱舞が過ぎ去ると、室内は再び静寂に満たされた。

そうして、後には魔撃帽だけが残された。



あとがき

こんには、海冬レイジです。
とうわけで、付録冊子SSをお届けします。ガッツリ40Pスケール！

筆の向くまま気の向くまま、おらり旅の気分で書きました——実際には山岳修行ばりの過酷さでしたが——ので、気楽な感じでお楽しみいただけたら嬉しいです！

水晶宮のくだりはもちろん、こないだ掲載のコミック版エピソードを受けたの発想です。あのお話がすこく可愛かったので、主役の二人にぜひ見せてあげたくなりました。

中身の方は——變則的な構成でびっくりされた方もいらっしゃいますかね☆。鏡の中で雷真と夜々が何を見たのかは、半月後にジーンの付録でわかります（ドヤアアー！）。「鏡の国」のシャル」はまた別のとき、別の場所で……本当に書けよ海冬レイジ？！

リアルな話、アンケートいっぱいきたら実現するかもね☆（ドヤアアー！※二回目）

引き続き、高城計さんの可愛くてカッコよくて燃えるコミック版をお楽しみください。

あと秋アニメもチェックしてね！ ではでは！

2013年8月 海冬レイジ



マシンドール 機巧少女は傷つかない Facing "Palace Laplace I"

発行 2013年9月27日

著者 海冬レイジ

発行所 株式会社 メディアファクトリー
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-3-5

©Reiji Kuro 2013



機巧少女は傷つかない Facing "Palace Laplace I"

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。英國万博で作られた建築物・水晶宮を夜々に見せたいと考えた鑑真。過去の水晶宮の姿を見ることができる〈ラプラス変換〉の魔具の存在をキンバリーに教えてもらう。さっそく重要機巧保管施設に赴いた二人だったが、突然、目的の魔具に取り込まれてしまい……。事件のおりを摸ざつけたシャルロットは、探偵に扮して捜査を開始。いろいろ・小柴・キンバリー・火垂を巻き込んで謎解きが始まったのだが——？